

2016 年度科学基礎論学会 ワークショップ
精神疾患と神経科学の関係を再考する

オーガナイザー：榊原英輔（東京大学大学院医学系研究科／東京大学医学部附属病院）

提題者：

榊原英輔（東京大学大学院医学系研究科／東京大学医学部附属病院）

「精神医学は神経科学から何を得られるか」

田所重紀（東京大学大学院総合文化研究科／室蘭工業大学保健管理センター）

「精神疾患は脳の障害ではない—「空脳論」の観点から」

植野仙経（京都府立洛南病院）

「精神疾患を脳の障害として考えることは誤りか」

信原幸弘（東京大学大学院総合文化研究科）

「精神疾患が脳の障害だという主張は何を意味するか」

企画の主旨：

精神医学の歴史を繙くと、精神疾患の本質についての相対立する独断的主張がなされてきたことが分かる。現代の精神医学は、入院を余儀なくされた重篤な患者の脳病理の解明を目指してきた生物主義と、自力で外来通院可能な患者に対し言葉による働きかけて治療を試みてきた心理主義が合わさって成立したものである。うつ病や統合失調症などの主要な精神疾患は、明確な脳神経病理が特定できなかつたため、両陣営の間で、その原因論について長らく論争が交わされてきた。しかし、1950 年代初頭に発見された抗精神病薬を端緒とし、その後も続々と向精神薬が発見されて臨床現場で用いられるようになると、生物主義が一気に優位に立つことになった。というのも、うつ病や統合失調症の症状を確かに改善した向精神薬の多くは神経伝達物質の動態に作用することが判明したからである。こうして 1980 年代から現在に至るまで、精神疾患を脳の障害と考える生物学的精神医学が時の勝利者となり、生物学的な精神医学研究が積極的に推進されてきた。しかるに、脳神経系の構造や機能さらには遺伝子研究の手法が劇的に進歩して 30 年が経過した現在でも、主要な精神疾患の原因が解明される兆しはない。生物学的精神医学の停滞は、その基本的前提そのものを再検討する必要性を示しているように思われる。はたして、精神疾患は脳の異常に由来する疾患と考えてよいのだろうか？本ワークショップでは、精神医学と哲学の双方に造詣の深い 4 名の演者が、生物学的精神医学の大前提に切り込む問題提起を行う予定である。